リリオだより　雑学シリーズ 85

2014/5/27

合唱組曲「筑後川」の誕生

◦「筑後川」誕生のいきさつ

昭和 38 年、コンサートホールとして設計の粋を尽くした「石橋文化ホール」が完成し、それを機に久留米市民の合唱団「久留米音協合唱団」が結成されました。

初めは二流に過ぎなかったアマチュア合唱団は、次第にメンバーを充実して成長し、昭和 43 年の創立 5 周年にあたり、なんとか自分たちのために書かれたオリジナル合唱曲が欲しいという願望が高まってきました。

そこで厚かましくも筑後川をテーマにした合唱組曲を團伊玖磨先生に書いて頂こうとブリジストン社長の石橋幹一郎氏にその願いを託しました。

それを石橋氏から團さんに伝えられたところ、思いがけず快諾を得ました。

團伊玖磨さんの妹の朗子（さえこ）さんが、ブリジストン社長の石橋幹一郎氏の夫人という関係で、團さんはブリジストンや久留米市と深いつながりがありました。

この「石橋文化ホール」は、石橋幹一郎氏の父でブリジストンの創業者石橋正二郎氏が建設し、久留米市に寄贈したものです。

早速現地へということで、昭和 43 年 5 月、團さんは久留米に出向いて、医者で詩人でもあった地元の丸山豊氏に作詩を依頼しました。

團さんは阿蘇山麓の小国町から日田市、夜明ダム、吉井町と河口の大川まで、何度も筑後川の流域を歩きました。城島ではエツを獲る小舟にも乗りました。神奈川県葉山の自宅に戻り、すぐまた筑後川に出かけることもありました。

「一過性の歌ではなく末長く歌われる曲を作りたい」という團さんの思いが深くて、なかなか思うように筆が進みませんでした。

初演の予定を二度も延期して、暮れも押し迫った昭和 43 年 12 月 20 日、やっと演奏会が開かれる運びとなりましたが、この曲の終章「河口」の楽譜が合唱団の手に渡ったのは、なんと本番 3 日前という綱渡りのようなことでした。

かくして合唱組曲「筑後川」が完成し、「石橋文化ホール」で團伊玖磨自身の指揮で感動的な初演がなされたのでした。

◦卒業式になぜ「河口」？

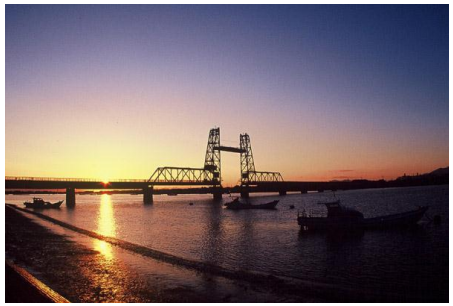
作曲されて間もなく中学校の音楽の教科書に載ったこともあり、九州地区に限らず全国の多くの中学校の卒業式で「河口」が歌われています。

中でも「河口」の舞台となった町、福岡県大川市の大川小学校では、平成 11 年 3 月以来、卒業式に六年生が「河口」を歌うことが恒例になっています。

でもなぜ卒業式に「河口」なのでしょう？

小さい川が大河となって新しい世界に巣立って行く様を表現しているためです。

阿蘇外輪の岩間から発した一滴の水が、右に左にうねりながら大きさを増し、ダムに阻まれたり、銀の魚を躍らせながら東シナ海に出て行く。さながら人生を重ね合わせたような詩です。



夕映えの筑後川河口

終章の「河口」は、丸山さんの詩の表題は「河口夕映」となっていました。

丸山さんは「筑後川」が有明の海へ注ぎ、美しい夕映えに沈む河口で終わりたいと考えていました。

ところが團さんは丸山さんに「河口夕映」から「夕映」の 2 文字の削除を求めました。

このことに團さんの意図がはっきり示されています。

夕映えから連想される静かで感傷的なフィナーレではなく、『川は河口で終わらない。河口は新しい門出なのだ！』と團さんは考えたのです。

歌詞全体を変えることなく、壮大なエンディングで新たな旅立ちのための力強さを表現しています。

かくして完成した「河口」の終結部は、フォルティシシモ(◎◎◎)の和音にアクセント(>)がかかり、かつクレッシェンドで終結するという壮大なものです。

初演以来 46 年も歌い継がれ、楽譜が通算第 95 刷と超ロングランに発行されている事実から見て、「一過性ではなく末長く歌われる曲を作りたい」という團さんの当初の思いは、見事に実現しています。

なお、中野政則著「團さんの夢」（出窓社）は一読をお薦めできる参考書です。

亀岡弘志（記）